

日本文学研究(古典)

咲本 英恵

2017年に発表された研究成果の中から、和歌の修辞が持つ表現の豊かさに触れた論をいくつか紹介したい。

松田浩ほか編『古典文学の常識を疑う』(勉誠出版、2017.5)は、通説に対し新たな発想や視点を提供して刺激的である。大浦誠士「「枕詞は訳さない」でいいのか」(同書)は、枕詞が様式化する過程で分厚い意味を持つようになることを論じ、だからこそ枕詞は「訳したくても訳せない」という。しかし、主意とは異次元の「社会的古文脈」にあって、権威性・非日常性を装いつつ人々の共感を引き出し、歌の世界に巻き込んでゆく枕詞の力を論じる同氏「枕詞の古代性をどう見るか」(『国文学解釈と鑑賞』76-5、2011.5)や、人麿独自の枕詞が後代において様式化されながら多様なイメージや意味を付与されてゆくさまを捉える「枕詞と様式」(『上代文学会』118、2017.4)は、枕詞が喚起する多様なイメージが歌全体の意味の豊かさを保証することを示す。訳せない分厚いイメージを、我々はどう伝えることができるのだろうか。

序詞論として注目したのは、遠藤耕太郎「序詞における音と意味—ナシ族歌謡の「ゼンジュ」の実態から—」(『共立女子大学・共立女子短期大学総合文化研究所紀要』23、2017.3)である。中国少数民族・ナシ族の歌謡には「ゼンジュ」と呼ばれる和歌の序詞に似た修辞がある。その例として挙げられた「サンコウ鳥の尾が長いように、長い間お会いしませんで

した」という歌の一節は、たしかに百人一首に見える人麿の序歌を容易に想起させる。氏はゼンジュのありようと歌い手の意識を調査・取材した上で、ゼンジュにとって大事なものは、「音」の重なり(例歌で言えば「シャ」と、前句が後句の「比喻」となっていることだと指摘し、「意味以外の感動を表す音」と「比喻としての意味」の両方によって「心の感動を表現する修辞」であるゼンジュをモデルに、「風吹けば沖つ白波龍田山夜半には君がひとり越ゆらん」(『古今集』994)を、沖の白波が跳ねあがるように不安で沸き立つ心の状態が、夜中に龍田山を越えている男を思う女の心のイメージ的な比喻になっていると論じる。

植木朝子「中世歌謡の言葉とイメージ」(『日本文学』66、2017.7)は、三代集周辺時代には、「波が越す」という表現を伴って恋人の心変わりを意味する不吉な歌枕だった「末の松山」が、中世歌謡においては、「松」の常緑樹としての普遍性や長寿のイメージ、また和歌世界に「末の松山を波が越すことと変わらない心とを対置する歌い方」が登場したことによって、賀歌に用いられるようになることを論じる。和歌のイメージや伝承が歌枕に作用し、新たな歌が再生産されてゆくことを論じる錦仁「歌枕は存在するか—「末の松山」ほか—」(同上)も興味深い。

和歌の修辞は、様式化される過程で多様な意味を持つ表現形式となった。丁寧に訳さなくてはもったいない。音やイメージを言葉の奥に透かし見ることも大事だ。うすうす気づいていた気がするが、よくよくそれを理解する一年となった。

(流通経済大学)